

「資質」領域でのコミュニケーション・スキルと A.Adler 共同体感覚の相互性

—レジリエンス「資質」「獲得」2因子による検討—

Interaction between communication skills in the area of "qualities" and A. Adler's sense of social interest by two factors of resilience

"qualities" and "acquisition"-

牧 裕 夫 (作新学院大学人間文化学部)

小野崎 瑛 美 (西真岡こどもクリニック)

Maki Hiroo (Sakushin Gakuin University, Faculty of Human and Cultural Sciences)

Onozaki Eimi (Nishimoka Children's Clinic)

要 約

Adler は「共同体感覚」としての体験が最早期段階から重要であると指摘している。Bowlby の愛着理論では遺伝的な要因だけでなく、最早期での重要な他者との関係が適応的な愛着の萌芽へ導くとした如くである。Adler が生きた20世紀では、彼が個人心理学とした個別性に基づく理論に対して数量的な実証研究は進んではいなかった。21世紀となり自然災害、貧富の二極化、環境問題等にあつて、壊れない頑強さ（ハーディネス）ではなく、壊れる状況からの回復力（レジリエンス）への実証的な研究が進んでいる。レジリエンス研究は Adler の基本理論「器官劣等説」と接点を有する。

Cloninger の気質・性格理論に基づく「資質的」「獲得的」の2因子によるレジリエンス尺度 BRS がある。前者の「資質的」側面にコミュニケーション・スキルが関係しているという研究が進められている。本論では、そのスキルの状態と共同体感覚との相互性を仮定した。結果としてそれら2要因の交互作用が認められず、共同体感覚において「資質的」と「獲得的」での機序の違いが示され、むしろ「資質的」レジリエンスにおいて共同体感覚の在り方が関連していた。Adler 理論研究での従属変数としてレジリエンスを採用する意義を指摘した。

I. 問題の所在

1. レジリエンスとは

現代社会におけるストレスラーとして、災害やライフイベント、生まれ持ったハンディキャップや対人関係など様々なものが存在している。これらストレスラーによるストレスへの一次予防的アプローチや、心理的に不適応な状態からどう立ち直り心理的に成長するかといった観点から注目されている概念の1つにレジリエンス (resilience) がある (上野・飯村・雨宮・嘉瀬、2016)。

レジリエンスとは、ストレスラーに晒されてもなお心理的健康を維持する力や、一時的に不適応状態になった場合でもそこをから健康な状態へと回復しその経験を糧に成長する力であるといえるであろう。また、誰も獲得可能で身につけることのできる力であるといわれている (Grotberg, 1999; 2003)。日本においては小塩・中谷・金子・長峰 (2002) による“(レジリエンスの状態にあるものとは) 困難で驚異的な状態にさらされることで一時的に心理的不健康の状態に陥っても、それを乗り越え、精神的病理を示さず、よく適応している者”の定義も多く使われている。

2. 今日のレジリエンス研究

初期に行われた縦断研究として、ハワイのカウアイ島におけるハイリスクな環境にある545名の子どもを対象とした Werner (1996) の縦断研究が有名である。この研究は32年間続けられ、出生前ストレスや貧困、母親の教育程度の低さなどを不適応へ導く危険要因とし、この危険要因が子どもの発達へ与える影響に当初は注目していた。しかし、研究が進んでいく中で危険要因を持っていながら適応的に発達を見せるレジリエンスに注目するようになっていった。

このカウアイ島の縦断研究をきっかけとして、アメリカでレジリエンス研究が注目されるようになった。その後、研究が始まった当初は対象者の貧困などのハイリスクな環境にあるものや外傷体験をした者などを中心に不適応を起こさない要因に着目しているものが多く、縦断研究も行われていた。日本国内におけるレジリエンス研究としては小塩ら (2002) の精神的回復力尺度の作成を行った研究が挙げられる。この研究では、ハイリスクな環境にある対象者に対してではなく、大学生を対象に苦痛を伴うネガティブなライフイベントを経験していても自尊心が高い者をレジリエンス状態にあるとした上で、その状態の者のレジリエンス得点が高いかについて尺度の妥当性の検討を行っている。その結果、色々なことにチャレンジしようとする「新奇性追求」、自らの感情をうまくコントロールすることのできる「感情調整」、明るくポジティブな将来を予測し、そこへ向けて努力しようとする「肯定的な未来志向」という男女共通の3因子から精神回復尺度が成ることが示された。

3. Adler 心理学とレジリエンス

(1) Adler 理論の今日と共同体感覚

20世紀初頭に Alfred Adler (1870-1937) が創始し、後継者たちによって体系化された「人間理解と援助のための心理学」として Adler の個人心理学がある（岸見、2019；鈴木、2017）。その Adler 理論として中核的な理論として器官劣等説がある。そもそも人はそれぞれ何らかの心身に差異があり、そこでは自ずと器官劣等を有することになる。時にその差異から病理、障害となることもある。しかしながら Adler は、人が自己実現に至るかは器官劣等の有無により決まるのではなく、むしろ器官劣等があるからこそ一人ひとり個性的な自己実現となるとする。つまり器官劣等な部分を如何に乗り越えようとするのか、それは「補償」の在り方によるとする（岸見、2019）。

21世紀となり地球温暖化、巨大地震等自然災害が毎年のように発生し、世界的にコロナウイルスの感染が広がった。我が国では景気低迷状態にあり、常に生活が不安定な状態に置かれている。そこでは壊れない頑強さ（ハーディネス）ではなく、壊れる状況からの回復力つまりレジリエンスに基づく well-being への心理臨床的な介入が必要とされる。このネガティブな側面を肯定的に受容する過程は、20世紀から Adler が強調していた「器官劣等説」の発想と共通しているのではないか。

また、Adler 理論として中核的な理論として共同体感覚がある。その対極的な理論として「権力への意志」がある。S.Freud が内的な性的欲動であるリビドーから精神分析を展開したが、Adler は内的な力動に着目せず、観察可能な日常での対人関係から自己実現への心理学を展開する。そこでは、Freud のリビドーに対して「権力への意志」を行動の根源的な特性とした。しかしながら、往時の世界大戦等の体験を経る中で、人よりもより優れた状態を求めるだけでなく、その共同体感覚の理論を展開する。Freud は病理理論から人の行動に対する一般的な理論を目指した。一方、Adler が活動した20世紀では「権力への意志」さらには「共同体感覚」にしても、個人心理学の名の如く個別性を志向した故に、実証的な研究には馴染まなかったであろう。しかしながら、21世紀となった今日、Adler 理論に対して実証的な研究が進められている（高坂、2011a；高坂、2011b；友尻、2011；山田・水野、2011）。その一つに共同体感覚研究がある。

高坂（2011a；2011b；2014）は共同体感覚を測定する尺度を青年版と小学生版の2種類作成し、「所属感・信頼感」「自己受容」「貢献感」といった3因子から尺度が構成されることを報告し、小学生・中学生・大学生で調査を行っている。そもそも Adler は幼児期や小学校時代を人間の人格が形成される時期であるとして重要視している。高坂（2014）は Adler のその見解を引き継ぎ、共同体感覚の変化や発達に対しても同様に幼児期等が重要であると指摘した。古庄（2007）によれば、Erikson の乳児期という最早期の発達課題である基本的信頼感と共同体感覚との関連が認められることから、共同体感覚が最早期段階

から後の人格形成に影響をもたらすことを重視しているとする。

(2) 最早期での共同体感覚（発達の側面）

前項で述べた様に、共同体感覚を十分に発達させるためには社会的な相互作用や教育によって外部から意図的な働きかけが必要であるとされている（浅井、2015；古庄、2007）。これは Bowlby の愛着理論と同様に、最早期から母親（養育者）との対象関係の中で交流を継続的に行うことにより共同体感覚の基盤が形作られ、その後は他者も交えた対人関係の中で発達していくものと考えられる。

この愛着理論とは、Bowlby（1969、1973、1977）によれば、愛着は“ある特定の他者に対して強い結びつきを形成する人間の傾向”であり、これは早期における個人の適応性を高めるために発達してきたとしている。また、養育者による情緒的受容性や反応性によって概ね規定されるということが早期の愛着関係の特質としている。そのため、愛着の発達は養育者（愛着対象）との継続された交流を繰り返していく中で、「愛着対象は応答してくれるのか」あるいは「自分は受容されるのか」といった予期が作られていくとされている（三上、2013）。このことから、愛着と同じように、共同体感覚もその資質を遺伝的に有しているが、外部（他者）からの刺激がないと萌芽せず、逆に適切な刺激を与えられれば所定の発達が起動する、ここでは最早期からの体験が重要となる。

愛着の萌芽の為に Bowlby は重要な他者との関係性が重要だと指摘するが、Bowlby の報告は20世紀の後半になる。共同体感覚が発達早期で重要とする Adler の発想は20世紀の前半ですでに報告されている（Adler、1927）。ある意味、愛着理論の先駆けともいえよう。前項で示した高坂（2014）、古庄（2007）の試みは、愛着理論と同様に先天的な資質の萌芽に関わる実証的な試みとなる。

4. 「資質」「獲得」とレジリエンス

(1) Cloninger の気質 - 性格理論

Cloninger, Svrakic, and Przybeck（1993）の気質 - 性格理論がある。これは、生物学的、遺伝学的な要因が強く影響するとされる気質と、環境的要因が強く影響するとされる性格の2つに性格特性を区別して捉えるものである（松田、2012）。そして、この理論から作成された質問紙が「Temperament Character Inventory（以下、TCI）」である。

木島・斎藤・竹内ら（1996）によると、TCIにおける気質とは遺伝性で主に幼年期に顕れて認知記憶や習慣が形成される際に前概念的バイアスを伴うとされる。また、行動の「触発」、「抑制」、「維持」、「固着」の四次元から構成されているとされ、それぞれ「新奇性追求」「損害回避」「報酬依存」「固執」の4つの尺度によって測定される。なお、「報酬依存」における報酬は対人関係の中で得られる他者からの受容や称賛といった社会的な報酬を指すとされている。

(2) 二次元レジリエンス尺度

平野 (2010) は、Cloninger et al. (1993) の TCI を用いることによって、生得的に保持しやすく気質との関連が強い資質的レジリエンス要因と、後天的に獲得されやすく性格との関連が強い獲得的レジリエンス要因の2つの視点からレジリエンスを測定する二次元レジリエンス尺度 (以下、BRS) を作成している。資質的レジリエンス要因は「楽観性」、「統御力」、「社交性」、「行動力」の4因子から成り、獲得的レジリエンス要因は「問題解決志向」、「自己理解」、「他者心理の理解」の3因子から構成されている。

資質的レジリエンスはストレスや心理的な傷つきをもたらす状況に合っても感情的に振り回されることなくポジティブに、そのストレスを乗り越えるような新しい目標へと気持ちを切り替えて周りのサポートを得ながら目標を達成できるような回復力であるとされている。一方、3因子の獲得的レジリエンスは、この要因は自らの感情や思考を把握することでストレス状況をどう改善したいかという意志をもって、自らと他者の両者の心理について理解を深めて解決へ繋げて立ち直っていく力とされている。平野は、レジリエンスを引き出すために個人気質に合ったレジリエンス、つまりその人が生まれ持った能力に合った援助する側が把握したうえで、能力を引き出すための対処方略を教えるといった臨床心理学的介入が必要であるとしている。

このように、レジリエンスには生まれ持った気質と関連の強いものと、後天的に獲得しやすい性格と関連の強いものの2種類があり、それぞれで影響を与えることのできるストレスラーにも違いがあることを示している。これは、齊藤・岡安 (2009; 2014) の一次的レジリエンスと二次的レジリエンスが働く対象が別であるというレジリエンスの分類とも一致する。

5. 「資質」「獲得」からスキル研究の統合

平野 (2010) の「気質」と「獲得」に着目し、スキルを総合的に生理・統合しようとする研究が報告されている。レジリエンスに影響を及ぼす要因として報告されている中にソーシャル・スキル (社会的スキル) やコミュニケーション・スキルがある。レジリエンスを育むための介入プログラムには内容や目的、方法によって様々なものがあるが、方法によって“スキル重視型”、“体験重視型”、“環境整備重視型”に分けられることが報告されている (原・都築、2013; 2014)。スキル・トレーニングやスキル教育などを通して行われている。

藤本・大坊 (2007) はこの多義的なスキルの概念を次の3つの階層構造として整理し、ENDCORE モデル (表現力と自己主張に共通した ENCODE、読解力と他者受容に共通した DECODE、自己統制の CONTROL、関係調整の REGULATION の頭文字を意味する) を提唱した (Figure 1)。3つの階層がストラテジー (文化や社会に適応する上で必要な能力)、ソーシャル・スキル (対人関係に重きをおいた社会性に関係する能力)、コミュニ

ケーション・スキル（言語と非言語での直接的なコミュニケーションを適切に行う能力）である。縦軸では、文化や社会において共通する汎用的な能力から自己の能力までを示し、横軸では能力ではなくその多様性の違いを示している。このモデルの中でもコミュニケーション・スキルに着目し、作成された尺度が ENDCOREs（sはメインスキルと呼ばれる6因子が複数のサブスキル・項目から成ることを意味する）である。実際に、この尺度を用いてコミュニケーションやスキル・トレーニングなどの研究が行われている（行平・清水・八木・青島、2017；杉山・比嘉、2017など）。藤本・大坊（2007）に作成・整理された ENDCORE モデル・ENDCOREs であったが、これらについて残っていた妥当性・信頼性の検討、コミュニケーション・スキルの実証的な定義の問題等について藤本（2013）は後に2,000人以上を対象として再検討を行い、藤本・大坊（2007）と同様の結果を得ている。

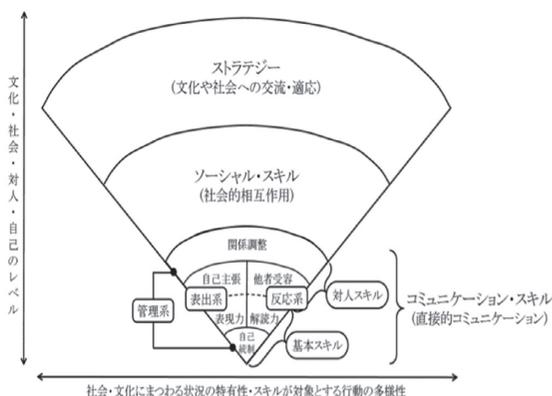


Figure 1 スキルを階層構造として捉えた “スキルの扇”（藤本・大坊，2007より引用）

大坪（2017）は、ストレス反応とソーシャル・サポートを併せることで平野（2010）の資質的・獲得的レジリエンスとの関連や影響について調査し、資質的レジリエンス要因に対してコミュニケーション・スキルの「自己統制」、「他者受容」、「自己主張」、「関係調整」が影響を与えており、獲得的レジリエンス要因に対しては「表現力」、「解読力」、「他者受容」、「自己主張」のスキルが影響を与えていた。

大坪（2017）は、ストレス反応とソーシャル・サポートを併せることで平野（2010）の資質的・獲得的レジリエンスとの関連や影響について調査し、資質的レジリエンス要因に対してコミュニケーション・スキルの「自己統制」、「他者受容」、「自己主張」、「関係調整」が影響を与えており、獲得的レジリエンス要因に対しては「表現力」、「解読力」、「他者受容」、「自己主張」のスキルが影響を与えていた。

II. 目的

本論では BRS によるレジリエンスの「資質的」因子と「獲得的」因子という二次元構造に着目する。齊藤・岡安（2009）の分類では「資質的」「獲得的」それぞれのレジリエンスによって働く機序も異なることが示されている。しかし、遺伝的な性質を背景とする資質的なレジリエンスも後天的な体験とは無縁ではない。問題の所在で Bowlby による愛着理論を紹介した。そこでは愛着を日常で適応的に実現しているかは、遺伝的な要因そのものでなく、少なくともその萌芽にあたっては最早期での重要な他者との関係性を必要とする。つまり、気質的な要因といえども、それが萌芽しえるかは、必ずしも遺伝的な要因に閉じている訳ではない。構成する資質的因子から後天的にも対人関係等によって発達・変容していく過程を前提として本論の検討とする。

Adler による共同体感覚、この「共同体」が示す通り、そもそも他者との関連を必要条件とした体験である。気質か環境かは自ずと曖昧になり、その実証をどうすべきかわかれる。

本論では以下の様に捉えたい。BRS 気質—性格の 2 因子によるレジリエンスに対して、Adler 自身また Adler の見解に基づき高坂 (2011a; 2011b; 2014) は、共同体感覚でもそれぞれ先天的な側面に基づく資質的側面との関連を仮定している。大坪 (2017) の研究からは ENDCOREs が資質的側面であることの研究を示している。共に資質的側面に対する要因とすれば、ENDCOREs と共同体感覚の間で交互作用が想定される。この想定によれば BRS での「資質」「獲得」2 因子に対して、ENDCOREs、共同体感覚それぞれの在り方により異なった結果となる。

本論は、① ENDCOREs の妥当性を共同体感覚との関連で検討すること、② Adler の共同体感覚そのものが誕生後早期としての資質的レジリエンスと関連すること、これらの検討を目的とする。

Ⅲ. 方法

1. 調査対象者

私立 A 大学に在籍し、調査期間中の講義を受講していた18~29歳の1~4年生157名に調査を依頼した。分析の際には、複数回答や対象年齢外、不適切回答や欠損値のあるものを除いた147名(男性59名、女性87名、その他1名、平均年齢=20.129歳±1.803)を対象とした。

2. 調査期間

2019年6月13日~2020年7月16日の大学の講義時間内を調査期間とした。

3. 質問紙

本研究では、コミュニケーション・スキルと共同体感覚が資質的レジリエンス要因と獲得的レジリエンス要因に与える影響を調査することを目的として、Google 社の Google フォームを使用し web ベースの質問紙を作成し実施した。その際の回答形式は全ての尺度で均等目盛りとし、単一の回答となるようにした。なお、Google フォームで実施できない被験者に対しては紙の質問紙にて Google フォームと同様の形式で実施し、個別に回収を行った。

以下、使用した3つの尺度について記述する。

(1) BRS 尺度

レジリエンスを測る尺度として、平野 (2010) が作成した二次元レジリエンス要因尺度 (BRS) を使用した。これは、7 因子21項目 (各因子 3 項目ずつ) から成る質問紙であり、

資質的レジリエンス要因に該当する因子として「楽観性」、「統御力」、「社交性」、「行動力」の4つ、獲得的レジリエンス要因に該当する因子として「問題解決志向」、「自己理解」、「他者心理の理解」の3つから構成されている。「1. いいえ」、「2. どちらかというといいえ」、「3. どちらでもない」、「4. どちらかというとはい」、「5. はい」の5件法で回答を求めた。

(2) ENDCOREs 尺度

コミュニケーション・スキルを測る尺度として、問題の所在で述べた藤本・大坊(2007)のENDCOREsを使用した。これは、メインスキルとしての「自己統制」、「表現力」、「解読力」、「自己主張」、「他者受容」、「関係調整」の6因子と24項目(各因子4項目ずつ)のサブスキルから成る質問紙となっている。尺度項目は以下の通りである。「1. かなり苦手」、「2. 苦手」、「3. やや苦手」、「4. ふつう」、「5. やや得意」、「6. 得意」、「7. かなり得意」の7件法で求めた。信頼性と妥当性については当初は確認しきれていない点もあったが、後の藤本(2013)にて確認されている尺度である。

(3) 共同体感覚尺度

Adler理論の観点からもレジリエンスに対する検討を行うため、高坂(2011a)が作成した「共同体感覚尺度」を使用した。これは、高坂が先行研究をもとに「所属感」、「信頼感」、「貢献感」、「自己受容」の4つの側面から共同体感覚尺度を作成し、最終的に「所属感・信頼感」、「自己受容」、「貢献感」から成る3因子22項目から成る尺度となっている。なお、中学生と大学生を対象に調査を行い、尺度の信頼性と妥当性を検討したものとされている。「普段のあなたにどの程度あてはまりますか」という教示のうえで「1. まったくあてはまらない」、「2. あまりあてはまらない」、「3. どちらともいえない」、「4. ややあてはまる」、「5. とてもあてはまる」の5件法で回答を求めた。

4. 手続き

本調査では、大学の講義時間中に集団形式で無記名により実施した。講義受講者に本調査についての説明を行った後、基本情報の記入、BRS、ENDCOREs、共同体感覚尺度の順番で実施した。実施時間は10分程度で、調査者の合図で一斉に開始し参加者全員が回答し終わるまで行った。本調査についての説明の際には、QRコードを載せたA4用紙を配布し研究内容の説明を行った。倫理的配慮の説明としては、複数回回答があるかの判断のためにのみ学籍番号を使用し、個人が特定されることはないことを伝えた。また、個人情報やデータの取り扱いの配慮や調査への不参加等による不利益はないことを伝えた。

5. 分析

本調査で得られた結果について、個人ごとに各因子の合計と平均、標準偏差を求めた。分析には、IBM SPSS Statistic 27を用いた。

IV 結果

1. 記述統計

各尺度における結果を概観するため記述統計量を算出した。平均値と標準偏差に基づいて天井効果・床効果の基準として考えた場合、天井効果と床効果については確認されなかった。各質問紙における下位尺度の内的整合性を計るためクロンバックの α 係数を算出したところ、BRSの「資質的レジリエンス」が $\alpha=.877$ 、「獲得的レジリエンス」では $\alpha=.768$ と後者でやや低い数値であった。また、ENDCOREsの6因子の中で「自己統制」のみ $\alpha=.691$ と信頼性係数がやや低いことが示された。共同体感覚尺度3因子では、 $\alpha=.899\sim.922$ と高い信頼性となっている。前述した平野(2010)と藤本・大坊(2007)と同様に、また共同体感覚尺度の因子も含めた全因子を以降の分析対象とする。

Table1. BRS・ENDCOREs・共同体感覚尺度における相関分析 (N=147)

	SEX	BRS		ENDCOREs						共同体感覚尺度		
		資質的レジ リエンス	獲得的レジ リエンス	自己統制	表現力	解読力	自己主張	他者受容	関係調整	所属感・ 信頼感	自己受容	貢献感
SEX	---	-0.08	-0.105	0.009	-.185**	-0.028	-0.107	0.019	-0.059	-0.084	-0.101	-0.007
B R S	資質的レジ リエンス	---	.740***	.626***	.608***	.651***	.612***	.566***	.628***	.738***	.661***	.657***
	獲得的レジ リエンス		---	.597***	.610***	.737***	.652***	.645***	.638***	.601***	.562***	.567***
E N D C O R E s	自己統制			---	.475***	.652***	.592***	.601***	.671***	.473***	.370***	.622***
	表現力				---	.559***	.675***	.458***	.504***	.583***	.499***	.502***
	解読力					---	.626***	.607***	.732***	.506***	.431***	.525***
	自己主張						---	.551***	.642***	.498***	.487***	.544***
	他者受容							---	.697***	.576***	.455***	.523***
	関係調整								---	.628***	.484***	.574***
共 同 体 感 覚 尺 度	所属感・ 信頼感									---	.722***	.708***
	自己受容										---	.491***
	貢献感											---

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

2. 相関分析

次に、各因子間の関係性について検討するため、各下位尺度間の相関に対して Pearson の相関分析を行った (Table 1)。その結果、性別については全ての下位尺度との間に相関は見られなかった。しかし、尺度内相関・下位尺度間では全てにおいて ($r = .370\sim.740$, $p < .001$) と弱い～強い相関が有意であり、BRS と ENDCOREs、共同体感覚の間には関連があることが示された。

3. 共分散構造分析

前項の各尺度間の相関係数の結果では、全ての因子間で相関を示している。仮説で述べたように、BRS の 2 因子を従属変数として、共同体感覚と ENDCOREs による 2 要因間の

交互作用としてのモデルを仮説として想定した (Figure 2)。共分散構造分析の結果、 $\chi^2 = 41.0$ ($p < .000$)、RMR = .065、GFI = .860、AGFI = .775とモデルの適合度は高くはなかった。そこで要因間の関係性を確認する為に以下、分散分析による検討を行う。

4. 分散分析の結果

(1) 被験者内要因の分散分析

ENDCOREs に対して共同体感覚の主効果と交互作用を検討するため、BRS (資質的・獲得的レジリエンス) を従属変数とし、被験者内分散分析を行った。独立変数は、ENDCOREs と共同体感覚尺度の下位尺度得点の平均を基に各尺度得点の高群 (以下 H 群) と低群 (以下 L 群) に分類している。

① BRS と共同体感覚における被験者内効果

従属変数は BRS (資質的レジリエンス・獲得的レジリエンス) とし、独立変数を共同体感覚尺度の各因子 (H・L 群による) とした被験者内分散分析である。その結果を Table 2 に示した。共同体感覚各因子「所属感・信頼感」、「自己受容」、「貢献感」の全てにおいて 0.1% 水準で有意に BRS との交互作用が認められた。

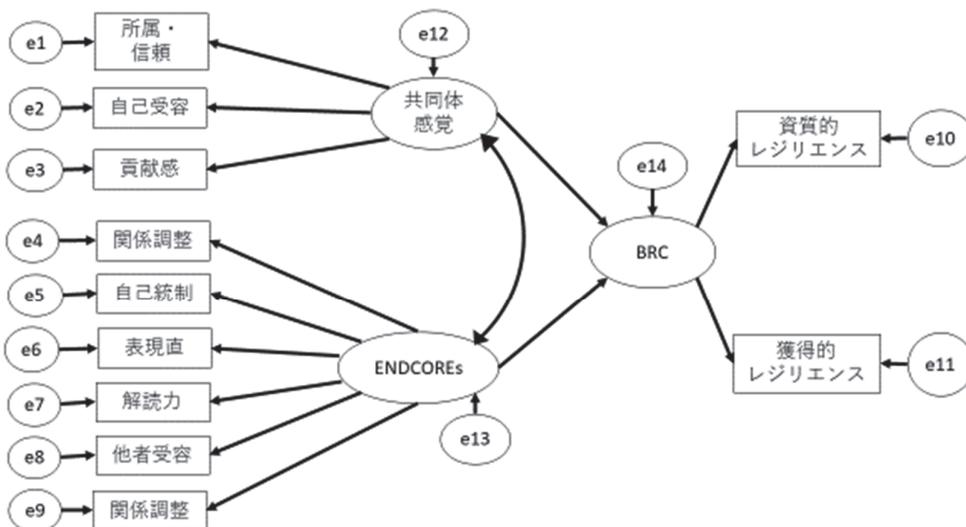


Figure 2 共同体感覚と ENDCOREs の交互作用による仮説モデル

Table 2. レジリエンス（「資質的レジリエンス」「獲得的レジリエンス」）を従属変数、共同体感覚尺度各因子の高群・低群（H 群、L 群）を独立変数にした被験者内効果

	n	M	SD	レジリエンスの 主効果	共同体感覚尺度 各因子の主効果	交互作用
所属感・ 信頼感 L 群	80	2.785	.728			
所属感・ 信頼感 H 群	67	3.730	.603			
所属感・ 信頼感 L 群	80	3.417	.694	$F(1,145)$ =107.432***	$F(1,145)$ =62.333***	$F(1,145)$ =15.981***
所属感・ 信頼感 H 群	67	4.010	.506			
自己受容 L 群	78	2.740	.639			
自己受容 H 群	68	3.748	.660			
自己受容 L 群	78	3.380	.656	$F(1,144)$ =108.198***	$F(1,144)$ =77.456***	$F(1,144)$ =17.172***
自己受容 H 群	68	4.023	.524			
貢献感 L 群	66	2.691	.670			
貢献感 H 群	81	3.644	.672			
貢献感 L 群	66	3.333	.691	$F(1,145)$ =119.044***	$F(1,145)$ =69.855***	$F(1,145)$ =11.712**
貢献感 H 群	81	3.978	.517			

*** p<.001, ** p<.01, *p<.05, †p<.1

そこで単純主効果の検定 Bonferroni 法を行う。「所属感・信頼感」を独立変数にした場合では資質的レジリエンスに対する単純主効果は有意であり ($F(1, 145) = 71.658, p < .001$)、同様に獲得的レジリエンスでも有意 ($F(1, 145) = 33.901, p < .001$) であった。この場合、「所属感・信頼感」での交互作用があったので、Table 2 の記述統計での平均得点の差異から、ここでの交互作用は資質的レジリエンスでの「所属感・信頼感」H 群と L 群の差異が獲得的レジリエンスでのそれらの差よりも大きいことによる。

以下、「自己受容」、「貢献感」それぞれを独立変数とした場合も同様であった。「自己受容」H・L 群の場合、資質的・獲得的レジリエンスに対して、それぞれ主効果が有意である ($F(1, 145) = 87.532, p < .001, F(1, 145) = 41.910, p < .001$)。「貢献感」の場合も同様にそれぞれ有意である ($F(1, 145) = 73.366, p < .001, F(1, 145) = 42.225, p < .001$)。「自己受容」、「貢献感」でも、「所属感・信頼感」と同様に記述統計の数値から、資質的レジリエンスでの独立変数の H 群、L 群の差が獲得的レジリエンスでの差がより大きいことから交互作用となっている。つまり、共同体感覚 3 因子共にそれぞれの高低により、資質的レジリエンスでその獲得状況に差がみられることであり、資質的・獲得的レジリエンスそれぞれ違った機序を反映する結果となっている。

Table 3. レジリエンス (BRS 因子「資質的レジリエンス」「獲得的レジリエンス」) を従属変数、ENDCOREs における各因子の高群・低群 (H 群、L 群) を独立変数にした際の被験者内効果の検定

		n	M	SD	レジリエンス の主効果	ENDCOREs に おける各因子の 主効果	交互作用																																																																																																																																																														
自己統制 L 群	資質的 レジ	76	2.780	.679	$F(1,145)$ =105.748***	$F(1,145)$ =73.414***	$F(1,145)$ =4.188*																																																																																																																																																														
自己統制 H 群	リエンス	71	3.683	.696				自己統制 L 群	獲得的 レジ	76	3.341	.619	$F(1,145)$ =108.657***	$F(1,145)$ =54.962***	$F(1,145)$ =3.742 [†]	自己統制 H 群	リエンス	71	4.058	.535	表現力 L 群	資質的 レジ	70	2.786	.724	$F(1,145)$ =106.537***	$F(1,145)$ =81.728***	ns	表現力 H 群	リエンス	77	3.607	.703	表現力 L 群	獲得的 レジ	70	3.349	.689	$F(1,145)$ =103.749***	$F(1,145)$ =57.568***	ns	表現力 H 群	リエンス	77	3.994	.509	解読力 L 群	資質的 レジ	64	2.708	.675	$F(1,145)$ =105.147***	$F(1,145)$ =60.058***	ns	解読力 H 群	リエンス	83	3.607	.703	解読力 L 群	獲得的 レジ	64	3.240	.625	$F(1,145)$ =108.282***	$F(1,145)$ =76.021***	ns	解読力 H 群	リエンス	83	4.032	.499	自己主張 L 群	資質的 レジ	77	2.850	.721				自己主張 H 群	リエンス	70	3.619	.734				自己主張 L 群	獲得的 レジ	77	3.343	.644				自己主張 H 群	リエンス	70	4.065	.498				他者受容 L 群	資質的 レジ	64	2.764	.730				他者受容 H 群	リエンス	83	3.564	.713				他者受容 L 群	獲得的 レジ	64	3.278	.670				他者受容 H 群	リエンス	83	4.003	.499				関係調整 L 群	資質的 レジ	64	2.710	.682				関係調整 H 群	リエンス	83	3.606	.699				関係調整 L 群	獲得的 レジ	64	3.260	.607				関係調整 H 群	リエンス	83	4.016	.540
自己統制 L 群	獲得的 レジ	76	3.341	.619	$F(1,145)$ =108.657***	$F(1,145)$ =54.962***	$F(1,145)$ =3.742 [†]																																																																																																																																																														
自己統制 H 群	リエンス	71	4.058	.535				表現力 L 群	資質的 レジ	70	2.786	.724	$F(1,145)$ =106.537***	$F(1,145)$ =81.728***	ns	表現力 H 群	リエンス	77	3.607	.703	表現力 L 群	獲得的 レジ	70	3.349	.689	$F(1,145)$ =103.749***	$F(1,145)$ =57.568***	ns	表現力 H 群	リエンス	77	3.994	.509	解読力 L 群	資質的 レジ	64	2.708	.675	$F(1,145)$ =105.147***	$F(1,145)$ =60.058***	ns	解読力 H 群	リエンス	83	3.607	.703	解読力 L 群	獲得的 レジ	64	3.240	.625	$F(1,145)$ =108.282***	$F(1,145)$ =76.021***	ns	解読力 H 群	リエンス	83	4.032	.499	自己主張 L 群	資質的 レジ	77	2.850	.721				自己主張 H 群	リエンス	70	3.619	.734				自己主張 L 群	獲得的 レジ	77	3.343	.644				自己主張 H 群	リエンス	70	4.065	.498				他者受容 L 群	資質的 レジ	64	2.764	.730				他者受容 H 群	リエンス	83	3.564	.713				他者受容 L 群	獲得的 レジ	64	3.278	.670				他者受容 H 群	リエンス	83	4.003	.499				関係調整 L 群	資質的 レジ	64	2.710	.682				関係調整 H 群	リエンス	83	3.606	.699				関係調整 L 群	獲得的 レジ	64	3.260	.607				関係調整 H 群	リエンス	83	4.016	.540													
表現力 L 群	資質的 レジ	70	2.786	.724	$F(1,145)$ =106.537***	$F(1,145)$ =81.728***	ns																																																																																																																																																														
表現力 H 群	リエンス	77	3.607	.703				表現力 L 群	獲得的 レジ	70	3.349	.689	$F(1,145)$ =103.749***	$F(1,145)$ =57.568***	ns	表現力 H 群	リエンス	77	3.994	.509	解読力 L 群	資質的 レジ	64	2.708	.675	$F(1,145)$ =105.147***	$F(1,145)$ =60.058***	ns	解読力 H 群	リエンス	83	3.607	.703	解読力 L 群	獲得的 レジ	64	3.240	.625	$F(1,145)$ =108.282***	$F(1,145)$ =76.021***	ns	解読力 H 群	リエンス	83	4.032	.499	自己主張 L 群	資質的 レジ	77	2.850	.721				自己主張 H 群	リエンス	70	3.619	.734				自己主張 L 群	獲得的 レジ	77	3.343	.644				自己主張 H 群	リエンス	70	4.065	.498				他者受容 L 群	資質的 レジ	64	2.764	.730				他者受容 H 群	リエンス	83	3.564	.713				他者受容 L 群	獲得的 レジ	64	3.278	.670				他者受容 H 群	リエンス	83	4.003	.499				関係調整 L 群	資質的 レジ	64	2.710	.682				関係調整 H 群	リエンス	83	3.606	.699				関係調整 L 群	獲得的 レジ	64	3.260	.607				関係調整 H 群	リエンス	83	4.016	.540																										
表現力 L 群	獲得的 レジ	70	3.349	.689	$F(1,145)$ =103.749***	$F(1,145)$ =57.568***	ns																																																																																																																																																														
表現力 H 群	リエンス	77	3.994	.509				解読力 L 群	資質的 レジ	64	2.708	.675	$F(1,145)$ =105.147***	$F(1,145)$ =60.058***	ns	解読力 H 群	リエンス	83	3.607	.703	解読力 L 群	獲得的 レジ	64	3.240	.625	$F(1,145)$ =108.282***	$F(1,145)$ =76.021***	ns	解読力 H 群	リエンス	83	4.032	.499	自己主張 L 群	資質的 レジ	77	2.850	.721				自己主張 H 群	リエンス	70	3.619	.734				自己主張 L 群	獲得的 レジ	77	3.343	.644				自己主張 H 群	リエンス	70	4.065	.498				他者受容 L 群	資質的 レジ	64	2.764	.730				他者受容 H 群	リエンス	83	3.564	.713				他者受容 L 群	獲得的 レジ	64	3.278	.670				他者受容 H 群	リエンス	83	4.003	.499				関係調整 L 群	資質的 レジ	64	2.710	.682				関係調整 H 群	リエンス	83	3.606	.699				関係調整 L 群	獲得的 レジ	64	3.260	.607				関係調整 H 群	リエンス	83	4.016	.540																																							
解読力 L 群	資質的 レジ	64	2.708	.675	$F(1,145)$ =105.147***	$F(1,145)$ =60.058***	ns																																																																																																																																																														
解読力 H 群	リエンス	83	3.607	.703				解読力 L 群	獲得的 レジ	64	3.240	.625	$F(1,145)$ =108.282***	$F(1,145)$ =76.021***	ns	解読力 H 群	リエンス	83	4.032	.499	自己主張 L 群	資質的 レジ	77	2.850	.721				自己主張 H 群	リエンス	70	3.619	.734				自己主張 L 群	獲得的 レジ	77	3.343	.644				自己主張 H 群	リエンス	70	4.065	.498				他者受容 L 群	資質的 レジ	64	2.764	.730				他者受容 H 群	リエンス	83	3.564	.713				他者受容 L 群	獲得的 レジ	64	3.278	.670				他者受容 H 群	リエンス	83	4.003	.499				関係調整 L 群	資質的 レジ	64	2.710	.682				関係調整 H 群	リエンス	83	3.606	.699				関係調整 L 群	獲得的 レジ	64	3.260	.607				関係調整 H 群	リエンス	83	4.016	.540																																																				
解読力 L 群	獲得的 レジ	64	3.240	.625	$F(1,145)$ =108.282***	$F(1,145)$ =76.021***	ns																																																																																																																																																														
解読力 H 群	リエンス	83	4.032	.499				自己主張 L 群	資質的 レジ	77	2.850	.721				自己主張 H 群	リエンス	70	3.619	.734				自己主張 L 群	獲得的 レジ	77	3.343	.644				自己主張 H 群	リエンス	70	4.065	.498				他者受容 L 群	資質的 レジ	64	2.764	.730				他者受容 H 群	リエンス	83	3.564	.713				他者受容 L 群	獲得的 レジ	64	3.278	.670				他者受容 H 群	リエンス	83	4.003	.499				関係調整 L 群	資質的 レジ	64	2.710	.682				関係調整 H 群	リエンス	83	3.606	.699				関係調整 L 群	獲得的 レジ	64	3.260	.607				関係調整 H 群	リエンス	83	4.016	.540																																																																	
自己主張 L 群	資質的 レジ	77	2.850	.721																																																																																																																																																																	
自己主張 H 群	リエンス	70	3.619	.734																																																																																																																																																																	
自己主張 L 群	獲得的 レジ	77	3.343	.644																																																																																																																																																																	
自己主張 H 群	リエンス	70	4.065	.498																																																																																																																																																																	
他者受容 L 群	資質的 レジ	64	2.764	.730																																																																																																																																																																	
他者受容 H 群	リエンス	83	3.564	.713																																																																																																																																																																	
他者受容 L 群	獲得的 レジ	64	3.278	.670																																																																																																																																																																	
他者受容 H 群	リエンス	83	4.003	.499																																																																																																																																																																	
関係調整 L 群	資質的 レジ	64	2.710	.682																																																																																																																																																																	
関係調整 H 群	リエンス	83	3.606	.699																																																																																																																																																																	
関係調整 L 群	獲得的 レジ	64	3.260	.607																																																																																																																																																																	
関係調整 H 群	リエンス	83	4.016	.540																																																																																																																																																																	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, [†] $p < .1$

② BRS と ENDCOREs における被験者内効果

従属変数を BRS (資質的レジリエンス・獲得的レジリエンス) とし、独立変数を ENDCOREs の各因子 (H・L 群による) とした被験者内分散分析の結果を Table 3 に示す。「自己統制」のみ5%水準で有意に BRS2 因子との交互作用が認められた。なお、有意傾向として「表現力」においても BRS2 因子との交互作用が認められた。ENDCOREs6 因子から確かに、主効果としてそれぞれの H 群が L 群よりも資質的・獲得的レジリエンスが高いという結果を示しているが、資質的、獲得的レジリエンスでの異なった機序としての関連をうかがえる交互作用の結果は極めて限定的であった。

(2) 被験者間分散分析

ここでは、ENDCOREs と共同体感覚双方を構成する因子間の相互作用により、資質・獲得両レジリエンスに関連があるかを検討する。レジリエンス得点に対する共同体感覚3因子と ENDCORE6因子との関連を検討する為に被験者間分散分析を行う。資質的レジリエンス、獲得的レジリエンスそれぞれを従属変数として、ENDCORE6因子それぞれのL群、H群と共同体感覚3因子それぞれL群、H群による2×2の被験者間分散分析を行った。

その結果、交互作用関連としては以下のとおりである。資質的レジリエンスを従属変数とした場合、有意な交互作用はみられず、傾向レベルで解読力×自己受容、関係調整×自己受容に対してであった。共に共同体感覚因子としては「自己受容」との関連である。獲得的レジリエンスを従属変数とした場合、5%水準で有意な交互作用として解読力×貢献感、傾向レベルで表現力×貢献感、関係調整×貢献感である。3つの交互作用をそれぞれ共同体感覚の「貢献感」が関わっている。

今回の結果では、ENDCOREs と共同体感覚と2要因間の相互作用による効果は限定的で、獲得的レジリエンスを従属変数とした場合で、それぞれの解読力×貢献感に止まった。

5. 共同体感覚、ENDCOREs のモデルでの適合度

前項の被験者間、被験者内分散分析の結果から、特に被験者内分散分析の結果として共同体感覚ではBRS2因子との交互作用が明確であり、一方で被験者間分散分析では共同体感覚と ENDCOREs 間でのBRS2因子それぞれに対する交互作用が限定的であった。そこで、BRS2因子を従属変数とする仮説モデルに対して共同体感覚と ENDCOREs を別々に設定することとした。

それぞれの仮説モデルに対して共分散構造分析から確定的因子分析を行った。その結果、共同体感覚での適合度の各指標は、 $\chi^2 = .934$ (ns), RMR = .003, GFI = .997, AGFI = .981, N=147となり高い適合度を示した。一方、ENDCOREs では $\chi^2 = 50.9$ ($p < .000$), RMR = .056, GFI = .921, AGFI = .851, N=147となり、カイ二乗値 χ^2 で帰無仮説が棄却され適合度としては十分な結果ではなかった。

Figure 3に高い適合度となった共同体感覚によるモデルを示した。推定値を記載している。モデル構築の場合、共同体感覚3因子の中で「所属・信頼」はE.Eriksonによる「基本的信頼」に関わる因子である。古庄(2007)によればEriksonの乳児期という最早期の発達課題である基本的信頼感と共同体感覚の3因子全ての関連が認められている。「所属・信頼」と他の2因子間での相関を想定した。またBRS2因子間では「獲得的」因子には、自ずと「資質的」因子からの影響が想定されることを想定した。しかしながら、資質的レジリエンスから獲得的レジリエンスへの影響は有意ではなかった。このモデル図から共同体感覚と資質的レジリエンスとの関連の強固さがうかがえる。

ENDCOREs では、気質的と獲得的レジリエンスそれぞれのあり方との関連で機序の違

いを示す関係性は見られなかった。共同体感覚では資質的と獲得的レジリエンスでの差異が Figure 3から明確であり、資質的と獲得的レジリエンスでそれぞれ別な機序で成り立っていることが明らかとなった。

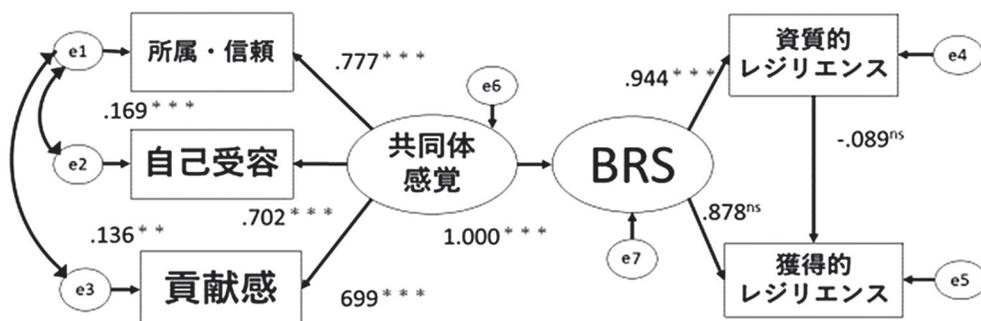


Figure 3 共同体感覚による仮説モデル
 ns : $p > .1$, * $p < .01$, ** $p < .001$, *** $p < .0001$

V 考察

1. ENDCOREs と共同体感覚の相互作用の所在

本論の仮説として BRS 資質的レジリエンスに対して ENDCOREs と共同体感覚間で交互作用があるとしていた。しかしながら、被験者間分散分析の結果では、まず BRS 資質的因子を従属変数として各因子に対して「読解力」×「自己受容」、「関係調整」×「自己受容」間で傾向レベルの結果に止まっている。BRS 獲得的側面でも同様であり「読解力」×「貢献感」で有意な交互作用となったことに止まる。これらの結果から、ENDCOREs と共同体感覚間で交互作用は限定的であったといえる。資質的側面と共に獲得的側面でも ENDCOREs と共同体感覚がそれぞれの従属変数に対して別々の作用となっている。

また、被験者内要因での分散分析では、Table 2、Table 3の結果で示したように共同体感覚では資質的と獲得的に対して交互作用があり、共同体感覚 3 因子全てにおいてそれぞれの H 群でレジリエンス得点が高く、そこで獲得的レジリエンスに対して、資質的レジリエンスで共同体感覚 3 因子それぞれの H 群と L 群の得点差の方が大きかった。つまりは共同体感覚 3 因子それぞれの機能の高低の在り方が獲得的レジリエンスよりも資質的レジリエンスで差をもたらしていた。このことは資質的レジリエンスと獲得的レジリエンス構造もしくは機序の違いを反映していることになる。

逆に、ENDCOREs の 6 因子でのレジリエンス得点での高低による被検査者内分散分析では、資質的レジリエンスと獲得的レジリエンス得点での交互作用は自己統制の高低で有意であったことに止まる。つまり、ENDCOREs では資質的レジリエンスと獲得的レジリエンスの機序の差異が限定的であったことになる。

2. Adler 理論とレジリエンス

共同体感覚と ENDCOREs、両者共に人の適応的な資源を改善、伸長させる要因といえる。しかしこの両者には根本的な差異がある。後者はスキル訓練による改善である。共同体感覚では負な側面そのものの改善というよりも、日常での関係性もしくは態度を問うている。確かにそこでは共同体感覚をどのように高めるのかという課題が伴うが、今回の結果では、明らかにスキルより、共同体感覚が資質レジリエンス、獲得的レジリエンスそれぞれの機序の違いに沿った関係性を指摘している。また、Adler 自身、それを受けた高坂が幼少期での共同体感覚を重視した結果を明確に示している。

本論で従属変数としてレジリエンスを採用したことで、ハーディネスとの違いがそこに反映したのではないか。レジリエンスには、そもそも所有していたスキルが通用しない状態を前提としている。そこでは自ずとその状況に対するメタ認知的な側面が問われる。共同体感覚の因子は「所属感」「自己受容」「貢献感」であり、確かにこれらはアドラー理論が「目的論」とするようにメタ認知的な側面である。

本論の目的としては ENDCOREs で示されたスキルが高ければ、共同体感覚でのメタ認知的な特性が高まるのでは、またその中でどのスキルが関連しているのかを検討しようとした。しかし、想定以上に共同体感覚が独自にレジリエンスの機能を方向づけていることが示されている。

3. 資質的レジリエンスと共同体感覚

Adler 心理学が20世紀初頭から展開しているが、「共同体感覚」「器官劣等説」等への実証的研究は Adler 自身が生きた20世紀の間では十分なされてはいない。本論では、この21世紀において Adler 理論の実証的な検証する試みとなっている。今回のそのエビデンスとしての検証を、主にレジリエンスという尺度により検討し共同体感覚の在り方から資質的・獲得的レジリエンスとの関連が明確になっている。

Adler は渡米する1935年以前、オーストリアのウィーンで臨床的な活動を展開している。その特徴の一つとしてマイノリティへの臨床がある。オフィスの中、有償で臨床をしていた Freud と異なり、Adler は貧しい、街で非行に走る子どもへの支援を展開している。共同体感覚もこれらでの体験と無縁ではないだろう。高坂 (2011a、2011b) によれば Adler は共同体感覚の獲得を特に子どもに求めていたという。高坂の報告でも誕生早期での共同体感覚の重要性を重視している。高坂が報告の中で取り上げた従属変数は Erikson の発達段階に関する尺度等である。本論ではレジリエンスに着目し、平野 (2012) による資質的、獲得的といった発達段階早期での心的機序を従属変数としている。今回の結果は、その早期に相当する資質的段階での様相を実証したことになる。

本論では ENDCOREs としてコミュニケーション・スキルと共同体感覚を取り上げている。仮説としては Bowlby 愛着理論の如く両者の交互作用を期待したところである。しか

しながら、その相互作用はかなり限定的であった。ただ留意すべき点があるだろう。今回取り上げた ENDCOREs はあくまでもスキルの獲得状態であり、ENDCOREs での6因子の獲得過程は必ずしも計画的・系統的な訓練によるとは限らないだろう。この点は共同体感覚でも同様で状態像であることに変わりはない。それではレジリエンスを高めるべく、共同体感覚の機能を高めるために何をすべきなのか。Adler (1927) は人間として他の動物と異なった属性として『人間知』を指摘している。その20世紀初頭の文献の中でも共同体感覚等その状態に至る多くの方法を呈示している。一方で個人心理学故にそもそも個々に異なる目的を有する人に対する方法であり一般化としてのエビデンスに困難さがある。ただ、少なくともエビデンスがない手法だから効果がないとは言えないだろう。Adler 心理学の特徴はむしろその知識、方法の多様さである。おそらく私見であるが「Adler の心理学」といった場合と、「Adler 心理学」とは異なった側面を有するであろう。Adler 心理学では Adler の指摘した『人間知』を後世に引き継ぎ踏襲することではなく、「Adler の心理学」に基づき、創造性ある人と人との間にある今日的な未知な法則性を見出し、その人間知を拡大することではないか。

この場合、レジリエンスを想定したスキル研究としても、ハーディネスを求める訓練というよりも、時にアドラー理論で見出されたメタ認知的な法則性にそって、そこに関わるスキルの検討・発見とその訓練プログラムへの検討といった方向性があるのではないか。

4. 共同体感覚の今日的意味

Adler は1911年に同じウィーンに在住していた Freud から離反している。そこでは Freud の汎性欲説での考え方の違いがよく知られている。しかし他に科学性においても見解の差があったのではないか。Adler は Freud のように無意識を中心とする内的力動関係について観察できない出来事を科学性として否定した理論となっている。Adler は観察可能な日常の関係性に着目し、その中での制御要因の検討を求めた。この試みから、動物とは違う人間らしさの根源として創造性に重きをおいた故であろう。共同体感覚はその観察可能な関係性から、人が適応的に、また自己実現を達成する要因として見出されたことになる。20世紀初頭、工業的なエビデンスを心理学に持ち込もうとした時代、機械や動物とは異なる創造性ある人間の心理学を実現する科学性としての Adler の取り組みである。

しかしながら、今日、心理学が数量的なエビデンスを求め中、単に「観察可能」だけの科学性から統計による科学性が主流になってきている。「共同体感覚」に対して実証的な研究として取り組む高坂の研究も質問紙法から数量的なエビデンスを求めている。本論も数量的な実証性に添うものである。そこでの実証性の困難さは Adler が重視した「補償」に対してどの変数を従属変数とするかであったのではないか。

問題の所在もしくは考察でも展開したところだが、今日レジリエンスが着目されている。その背景に昨今の自然災害の猛威があり、壊れない「ハーディネス (頑強性)」では

なく、壊れることを想定した「レジリエンス（回復力）」を重視している。このことは自然災害での物理的な環境に止まることではない。自然災害時の PTSD への対応、さらには人が人として成長する場合には失敗、上手いかなさ等を受け止める過程にある。レジリエンスが求められる場面は自然災害等に限られた状況に止まることはなく、人の生活すべての場面に及ぶだろう。

このレジリエンスだが、問題の所在で述べたように Adler 理論そのものが、このレジリエンスでの機能を先駆けて取り入れていたのではないか。また、その発想がそもそも「器官劣等説」ではないか。ここでは、「障害」「病气」ほか「日常での上手いかなさ」が有ること自体、問題状況として捉えるだけでなく、そこへの「補償」から一人ひとりが個人的な者として自己実現するとしている。この「器官劣等説」には、壊れないことではなく、壊れたことは時に不可避であるが、そこからの回復力そのもの、Adler 理論では「補償」を重視すべきという発想そのものである。さらに Adler は、単に元の状態に戻るだけでなく、その過程からこそ自己実現への可能性に開かれるとする。

5. 本論の限界と今後の課題

本研究では、コロナ禍ということもあり調査を行った母集団が限定的となってしまっているため、本結果を青年期一般の傾向として述べることはできない。この問題を解消するためには、調査対象を広げ人数を増やして再検討する必要があると思われる。

また、本研究ではレジリエンスを BRS の資質的レジリエンス要因と獲得的レジリエンスの2つの下位尺度として捉えた。そのため、獲得的・資質的レジリエンスのどの要因に対して共同体感覚やコミュニケーション・スキルが影響を与え得るか、または関連があるかについて述べることはできない。しかし、今後の研究では BRS を元の7因子として扱い、さらに実際の介入プログラム等を取り入れて実践的に研究を行うことによって、本研究以上にそれぞれの関係性についてより詳細な検討を行うことができるであろう。

本研究では平野（2010）の BRS を用いてレジリエンスを気質と関連の強い資質的レジリエンス要因と性格との関連が強い獲得的レジリエンス要因の二次元から捉えている。問題の所在で述べたように、この BRS は Cloninger の気質 - 性格理論から作られた TCI との関連が認められており、さらに国里・山口・鈴木（2007）により気質 - 性格モデルと Big Five モデルに強い関連が示され、気質 - 性格モデルから Big Five モデルを説明することが可能であると示されている。また、本結果では気質と関連が認められている資質的レジリエンス要因へ共同体感覚が影響を与えていることや、資質的要因にとって重要な存在であることが示されている。このことから、目的で述べたような共同体感覚とパーソナリティ障害との関連がある可能性も考えられるのではないだろうか。

Cloninger の気質 - 性格理論パーソナリティ障害を視野に入れて研究を行うことは、パーソナリティ障害の治療における有用な介入についての検討を行うことが出来るのではと考

える。共同体感覚とパーソナリティ障害との関連があると仮定した場合、パーソナリティ障害の治療時に自己を受け入れる作業や、患者が治療者を信頼し居場所を感じられるような関わりを取り入れることが有効であると考えられる。また、その関係が続けていくことで貢献感が生まれ、それを縦ではなく横の関係として受け取ることによって、共同体感覚が身につき勇気を得ることになる（鈴木、2017）。これは Adler の考え方に合致すると言えるのではないだろうか。実際、パーソナリティ障害に対する治療として、患者の言い分を否定するのではなく支持する支持的精神療法が行われている（伊藤・木村・尾崎ら、2006）。このことから、パーソナリティ障害に対して共同体感覚は有効に作用する可能性やパーソナリティ障害の患者にとって、治療の中断を阻止する以外にも重要な概念であることが考えられる。

これらのことを実証するためには、今後の課題として尺度構成や対象者などについて考え直す必要性があり、分析の際にも BRS を 7 因子のまま分析を行うことによって、本研究では扱うことのできなかったパーソナリティ障害との関連性についてより検討を行うことができるであろう。また、実践的な検討を行うことでより実証的な側面が検討されるよう期待したい。

【引用文献】

- Adler, A. (1927) *Menschenkenntnis* (高尾利数訳 1927 アルフレッド・アドラー『人間知の心理学』春秋社).
- 浅井健史 (2015). アドリアン・コンサルテーションの理論と実践 *コミュニティ心理学研究*, 19(1), 94-111.
- Bowlby, J. (1977). The making and breaking of affectional bonds. *British Journal of psychology*, 130, 201-210
New York: Basic Books (黒田実二他訳 1977 母子関係の理論Ⅱ：分離不安 岩崎学術出版).
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss, Vol.2: Separation: Anxiety and anger*.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss, Vol.1: Attachment*. New York: Basic Books (黒田実二他訳 1976 母子関係の理論Ⅰ：愛着行動 岩崎学術出版).
- Cloninger, C. R., Svrakic, D. M., & Przybeck, T. R. (1993). A psychobiological model of temperament and character. *Archives of General Psychiatry*, 50, 975-990.
- 藤本学 (2013). コミュニケーション・スキルの実践的研究に向けた ENDCORE モデルの実証的・概念的検討 *パーソナリティ研究*, 22(2), 156-167.
- 藤本学・大坊郁夫 (2007). コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み *パーソナリティ研究*, 15(3), 347-361.
- 古庄高 (2007). アドラー心理学における幼児期のライフスタイル形成 *神戸女学院大学論集*, 55(2), 85-96.
- Grotberg, E. H. (2003). What is resilience? How do you promote it? How do you use it? In Grotberg, E. H. (Ed.), *Resilience for today: gaining strength from adversity*, 2nd ed. Westport, CT: Praeger Publishers, pp. 1-30.

- Grotberg E. H. (Ed.) (1999). *Tapping your inner strength: How to find the resilience to deal with anything*. New Harbinger Pubns.
- 原郁水・都築繁 (2014). 保健教育への応用を目指したレジリエンス育成プログラムに関する文献的考察——我が国における教育実践から—— 教科開発学論集, (2), 193-198.
- 原郁水・都築繁 (2013). 保健教育への応用を目指したレジリエンス育成プログラムに関する文献的考察 教科開発学論集, (1), 225-236.
- 平野真理 (2012). 心理的敏感さに対するレジリエンスの緩衝効果の検討——もともと「弱さ」を後天的に補えるか—— 教育心理学研究 60(4), 343-354.
- 平野真理 (2010). レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み——二次元レジリエンス要因尺度 (BRS) の作成—— パーソナリティ研究, 19(2), 94-116.
- 伊藤幹子・木村宏之・尾崎紀夫・荒尾宗孝・木村有希・伊藤隆子・栗田賢一 (2006). 当科で経験したパーソナリティ障害患者の臨床的検討——境界性および自己愛性パーソナリティ障害の治療対策—— 日本歯科心身医学会雑誌, 21(1), 13-22.
- 木島伸彦・斎藤令衣・竹内美香・吉野相英・大野裕・加藤元一郎・北村俊則 (1996). Cloninger の気質と性格の 7 次元モデルおよび日本語版 Temperament and Character Inventory (TCI) 精神科診断学, 7, 379-399.
- 岸見一郎 (2019). アドラー心理学入門——より良い人間関係のために—— 40 版 KK ベストセラーズ.
- 国里愛彦・山口陽弘・鈴木伸一 (2007). Cloninger の気質・性格モデルと Big Five モデルとの関連性 パーソナリティ研究, 16(3), 324-334.
- 松田幸久 (2012). 大学生・専門学校生における食行動と性格特性の関連について ——Cloninger の気質の観点より—— 高岡法科大学紀要, 23, 41-53.
- 三上謙一 (2013). 愛着理論から見た心理療法の行き詰まりとその回復過程——逆転移としてのセラピストの眠気の意味—— カウンセリング研究, 31, 38-48.
- 大坪岳 (2017). 青年期のコミュニケーション・スキルとソーシャル・サポートがレジリエンスに及ぼす影響 追手門学院大学心理学, 25, 13-25.
- 小塩真司・中谷素之・金子一史・長峰伸治 (2002). ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性——精神的回復力尺度の作成—— カウンセリング研究, 35, 57-65.
- 齊藤和貴・岡安孝弘 (2014). 大学生のソーシャルスキルと自尊感情がレジリエンスに及ぼす影響 健康心理学研究, 27(1), 12-19.
- 齊藤和貴・岡安孝弘 (2009). 最近のレジリエンス研究の動向と課題 明治大学心理社会学研究, (4), 72-84
- 鈴木康宏 (2017). アドラー心理学を用いた医療系論文に関する文献検討 千葉科学大学紀要, (10), 183-189.
- 杉山由香里・比嘉勇人 (2017). 看護師の基礎的コミュニケーションスキルと援助的コミュニケーションスキルの関連性 日本精神保健看護学会誌, 28(1), 12-20.
- 高坂康雅 (2014). 小学生版共同体感覚尺度の作成 心理学研究, 84(6), 596-604.
- 高坂康雅 (2011a). 共同体感覚尺度の作成 教育心理学研究, 59(1), 88-99.
- 高坂康雅 (2011b). 青年期における共同体感覚とアイデンティティとの関連 日本心理学会大会発表論文集, 75, 1PM008-1PM0.
- 友尻奈緒 (2011). 劣等感とその補償について：質問紙と TAT を用いた調査より 京都大学大学院

教育学研究科紀要, 57, 211-224.

上野雄己・飯村周平・雨宮怜・嘉瀬貴祥 (2016). 困難な状況からの回復や成長に対するアプローチ
レジリエンス、心的外傷後成長、マインドフルネスに着目して一, 心理学評論, 59(4), 397-414.

Werner E. E. (1996). Vulnerable but invincible : High risk children from birth to adulthood. *European Child & Adolescent psychiatry*, 5 (Suppl.1), 47-51.

山田真行・水野基樹 (2011). 大学生における達成動機と劣等感との関連 順天堂スポーツ健康科学
研究, 4(58), 150-154.

行平真也・清水健一・八木光晴・青島隆 (2017). 乗船実習前後におけるコミュニケーション・スキル
の変化 本航海学会論文集, 137, 75-80. 浅井健史 (2015). アドレリアン・コンサルテーションの理
論と実践 コミュニティ心理学研究, 19(1), 94-111.

<付記>

本報告は作新学院大学大学院心理学研究科2020年度修了論文として提出された小野崎
瑛美による修士論文に対して本紀要論文として加筆、編集等により提出したものである。